

25th Anniversary
学び 集う 未来に

公益財団法人 大学コンソーシアム京都 会報50号・設立25周年記念号

UNIVERSITY CONSORTIUM KYOTO

No.50
2019.June

25th Anniversary
学び 集う 未来に



公益財団法人 大学コンソーシアム京都
会報 50 号・設立 25 周年記念号





大学コンソーシアム京都は、25 周年。

大学コンソーシアム京都は
2019 年に設立 25 周年を迎えました。
本誌では、25 周年を記念し、
これまでの軌跡を振り返り、未来を見つめます。



目次
contents

01　発刊の辞　「設立 25 周年を迎えて」 公益財団法人 大学コンソーシアム京都 理事長　仲谷善雄
02　祝辞「大学コンソーシアム京都設立 25 周年を祝して」 京都市長　門川大作
03　What's The Consortium of Universities in Kyoto?
07　写真と数字でみる大学コンソーシアム京都
09　特別寄稿①　「大学コンソーシアム京都に膨らむ期待」 公益財団法人 国立京都国際会館 館長　内田俊一
11　特別寄稿②　「大学コンソーシアム京都設立 25 周年に寄せて」 学校法人 同志社 総長・理事長　八田英二
13　大学コンソーシアム京都のこれまでの歩み
15　第 5 ステージ　これからの取組
17　「今・昔・未来」メモ
19　大学コンソーシアム京都　事業の全体像
21　ここにしかない学びを / 教育事業部
23　今後の教育を考える / 教育開発事業部
25　エネルギッシュな学生と京都を盛り上げる / 学生支援事業部
27　京都で活躍する大学生たち①
29　京都から世界へ　世界から京都へ / 国際事業部
31　地域に学び、まちのミライを変えていく / 調査・広報事業部
33　京都で活躍する大学生たち②
35　ミライ対談　−大学コンソーシアム京都への期待−
37　事業の変遷

公益財団法人 大学コンソーシアム京都 理事長
学校法人立命館 総長・立命館大学長

仲谷善雄

Yoshio NAKATANI



設立 25 周年を迎えて

大学コンソーシアム京都は、2019 年 4 月に前身の「京都・大学センター」の設立から 25 周年を迎えました。

1994 年に全国初の大学コンソーシアム組織として設立し、単位互換事業やインターンシップ事業、FD・SD 事業などの基幹的取組に加え、京都世界遺産 PBL 科目や地域連携事業など、全国に先駆けた取組を実施して参りました。

2000 年には京都市様のご尽力により、京都駅前に交流拠点となる「京都市大学のまち交流センター（愛称：キャンパスプラザ京都）」が開設され、当財団が指定管理者として管理運営を行っています。また、2010 年に公益財団法人へ移行し、現在、48 の加盟大学・短期大学に加え、地方自治体・経済団体が参画する全国最大規模のコンソーシアム組織へと発展しています。

大学コンソーシアム京都が長きにわたり、多様な事業を展開することができましたのも、ひとえに加盟校並びに関係者の皆様のご理解とご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

この度、25 周年を記念し、財団会報誌記念号を発刊する運びとなりました。本誌の発刊を契機としまして、これまでの歩みを振り返るとともに、今後の更なる発展に向けて、加盟校並びに関係者の皆様との連携をより一層深めて参りたいと願っています。本誌の発刊にあたり、玉稿をお寄せいただきました関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

2019 年 4 月からは、第 5 ステージがスタートいたしました。ICT の進展や Society5.0 の到来、グローバル化のさらなる進行など、かつてないスピードで社会環境は変化しています。第 5 ステージでは、地域コミュニティや経済団体、自治体との相互連携の強化に重点を置き、社会環境の変化にも対応しながら、多様な「学び」を求めるすべての人々の期待に応える取組を展開して参ります。

今後も、「大学のまち京都・学生のまち京都」の発展を目指し、地域連携のプラットフォームとして、より一層の精進を重ねて参る所存です。倍旧のご指導、ご鞭撻を心からお願いし発刊の辞とさせていただきます。

2019 年 6 月 22 日

京都市長
公益財団法人 大学コンソーシアム京都 顧問

門川大作

Daisaku KADOKAWA



大学コンソーシアム京都設立 25 周年を祝して

「大学のまち・学生のまち」京都の更なる飛躍を願い、37 の大学・短期大学が参加して 1994 年に誕生した「京都・大学センター」。全国でも例を見ないこの大学間連携組織は、その後「大学コンソーシアム京都」へと進化し、今では 48 の大学・短期大学、さらには経済団体等も加盟するオール京都の枠組みとして大きく発展を遂げています。貴財団がこの度、設立 25 周年の節目を迎えられましたことを心からお慶び申し上げますとともに、仲谷善雄理事長をはじめ歴代役員並びに会員の皆様に深く敬意を表します。

貴財団におかれましては、近年、その取組を更に大きく広げておられます。全国最大規模で展開する単位互換事業として、京都の世界遺産をフィールドに学ぶ「世界遺産 PBL 科目」の開設や、留学生の誘致から生活・就職支援までを一貫して行う「留学生スタディ京都ネットワーク」の運営、本市との協働により全国の中高生に「リアルな京都の魅力」を発信する「京都学生広報部」の創設…。本年 3 月には新中期計画「第 5 ステージプラン」を策定され、更なる未来を見据えて歩んでいこうとしておられます。また、貴財団と本市の大学政策を融合し、推進するための指針「大学のまち京都・学生のまち京都推進計画 2019－2023（愛称：京からはばたく，学びプラン）」の策定にも多大の御協力を賜りました。この計画には、持続可能な社会に向けた世界共通の取組目標「SDGs」や、あらゆる危機を乗り越えてより強靭になる「レジリエンス」の考え方も盛りこんでおり、貴財団の皆様と共々に、誰もが「京都ならではの学び」を通じて成長を実感できるまちづくりや、留学生を含む学生と地域等とのつながりの強化による京都の将来の担い手育成などを強力に推進して参る決意です。

貴財団の皆様が、今後も先駆的なお取組を重ねられ、京都から日本の高等教育を力強くリードされますよう念じています。

さて、いよいよ「令和」という新時代が幕を開けました。京都においても今後、国際博物館会議（ICOM）京都大会や「ワールドマスターズゲームズ 2021 関西ジャパン」の開催、機能を強化した「新・文化庁」の全面的移転や京都市立芸術大学の京都駅東部エリアへの移転などが控えています。私は、貴財団や大学関係者、学生や市民の皆様と力を合わせ、これらを京都の更なる発展につなげ、全国の地方創生も牽引していく決意です。皆様方のお力添えをお願い申し上げます。

結びに、公益財団法人大学コンソーシアム京都と加盟会員の皆様のますますの御発展を祈念いたします。

2019 年 6 月 22 日

What's The Consortium of Universities in Kyoto?

ここでは「公益財団法人 大学コンソーシアム京都」についてご紹介します。

設立のきっかけ

1980 年代中頃からの京都市外への相次ぐ大学転出の動きの中、京都市では大学振興を市政の重要な柱の一つと位置付け、大学と地域の総合的な発展を図るため、1993 年に「大学のまち・京都 21 プラン」を策定しました。このプランに基づき、1994 年に全国で初めての大学間連携組織である「京都・大学センター」（大学コンソーシアム京都の前身）が設立されました。2010 年には内閣府から、公益財団法人の認可を受け、多様な取組を展開しています。

目指すもの

京都地域の大学間連携と相互協力を図り、加盟大学・短期大学の教育・学術研究水準向上とその成果の地域社会、産業界への還元を目指します。
また、地域社会、行政及び産業界との連携を促進し、地域の発展と活性化に努め、京都地域を中心とした高等教育の発展と社会をリードする人材の育成を目指します。こうした理念を追求するため、5 箇年ごとに中長期計画「ステージプラン」を策定し、取組を着実に実行しています。

活動を支えるスタッフ

大学コンソーシアム京都事務局は、加盟校及び行政機関からの出向職員と直接雇用職員の約 50 名により構成されています。
職員は、事務局において「大学のまち・京都」の発展に向け、所属大学･機関の異なる同僚たちとともに、多様な業務や価値観に触れながら日々、業務遂行と自己研鑽に努めています。設立時から、これまでに約 150 名の大学職員を受け入れてきました。ここでの経験や人的ネットワークが自大学での業務にも活かされています。

ロゴマークについて

25th Anniversary
学び 集う 未来に

公益財団法人 大学コンソーシアム京都
The Consortium of Universities in Kyoto

2004 年に制定されたロゴマークに描かれた鞠のデザインは、学生公募で 156 作品の中から選ばれました。
京都の山紫水明や歴史・文化的資源を基盤とした産官学地域連携のさまを「鞠」にイメージし、大学コンソーシアム京都の理念である協働・結びつきによる教育・研究と、これからの国際的な発展が表現されています。
設立 25 周年を記念して 2019 年度限定のロゴマークをデザイン。「学び　集う　未来に」のメッセージは、大学コンソーシアム京都は、それぞれの大学で学ぶ学生が、大学の枠を超えて多様な学びの形を展開させる拠点であり、そこから、学生、大学、ひいては「大学のまち・京都」の未来の成長、発展につなぐ役割を担うことを表しています。

キャンパスプラザ京都

（京都市大学のまち交流センター）

大学相互及び大学と産業界・地域社会などの連携並びに交流を促進する活動等に供するため、2000 年に京都市が設置した施設であり、大学コンソーシアム京都の活動拠点になっています。
京都駅前の好立地を活かして、インターンシップ事業や単位互換事業、生涯学習事業などを展開しています。現在、指定管理者として、施設の管理運営を担っています。



加盟会員

48の加盟校とともに創る京都の未来

大学コンソーシアム京都は設立から 25 年が経過した現在、京都府下にあるすべての大学・短期大学に加え、京都府・京都市・経済団体が参画する全国最大規模の大学コンソーシアム組織に発展。そのスケールメリットを活かした取組や加盟校と京都地域の発展に資する事業を展開しています。



番号は、各校のキャンパスの概ねの位置を示しています。

大学コンソーシアム京都加盟会員一覧

大学・短期大学（2019 年 6 月現在）

1. 京都大学	2. 京都教育大学	3. 京都工芸繊維大学	4. 京都市立芸術大学
5. 京都府立大学	6. 京都府立医科大学	7. 福知山公立大学	8. 池坊短期大学
9. 大谷大学	10. 大谷大学短期大学部	11. 京都医療科学大学	12. 京都外国語大学
13. 京都外国語短期大学	14. 京都先端科学大学	15. 京都華頂大学	16. 華頂短期大学
17. 京都看護大学	18. 京都経済短期大学	19. 京都光華女子大学	20. 京都光華女子大学短期大学部
21. 京都産業大学	22. 京都女子大学	23. 京都精華大学	24. 京都西山短期大学
25. 京都造形芸術大学	26. 京都橘大学	27. 京都ノートルダム女子大学	28. 京都美術工芸大学
29. 京都文教大学	30. 京都文教短期大学	31. 京都薬科大学	32. 嵯峨美術大学
33. 嵯峨美術短期大学	34. 種智院大学	35. 成安造形大学	36. 同志社大学
37. 同志社女子大学	38. 花園大学	39. 佛教大学	40. 平安女学院大学
41. 平安女学院大学短期大学部	42. 明治国際医療大学	43. 立命館大学	44. 龍谷大学
45. 龍谷大学短期大学部	46. 大阪医科大学	47. 京都情報大学院大学	48. 放送大学 京都学習センター

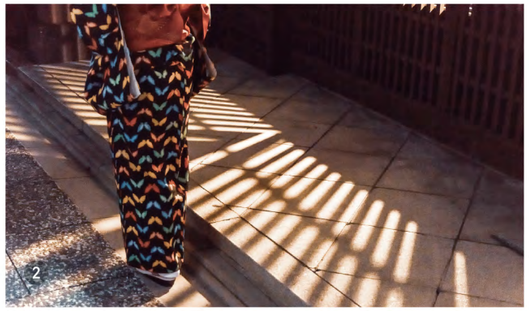
地方公共団体　京都府　京都市

経済団体　京都経営者協会　公益社団法人 京都工業会　一般社団法人 京都経済同友会　京都商工会議所

写真と数字でみる
大学コンソーシアム京都

Photos & Numbers





































1. 設立 25 周年を迎えた大学コンソーシアム京都は、キャンパスプラザ京都を活動拠点とし、加盟校とともに、今後も様々な事業を展開していく。 2. 西陣の町並みをやさしく灯す都ライト。学生のアイデアと地域の協力により、着物のレンタル・着付けや地域ツアーも実現。 3. 1997年に開講した生涯学習制度。2018 年度までに利用した市民の数は 26,861 名。 4. 単位互換では短期語学留学プログラムも実施。学生たちが学ぶメルボルンの街並み。 5. 他大学の特色ある科目や京都世界遺産 PBL 科目など、多様な科目を学べる単位互換制度。2019 年度、加盟校が提供する科目数は 415 にのぼる。 6. 学生による実行委員会で企画運営される「京都学生祭典」は 2019 年度に 17 年目を迎える。京都学生祭典本祭のオープニング企画である「開演『京炎そでふれ！』」では、1,167 名のおどり手が圧巻の演舞を見せた。 7. 加盟校の職員を対象としたSD 事業。様々なテーマ・観点から、管理運営や教育研究支援までを含めた資質向上のための研修を展開している。 8. 1998 年にスタートしたインターンシップ・プログラム。修了生は 9,582 名となり、「社会人基礎力」を身につけた卒業生が社会で活躍中。 9.「京都国際学生映画祭」は 2018 年度に第 21 回を迎え、33 の国・地域から 588 もの応募作品が集まった。 10. 大学・学生・地域の連携活動を支援する「学まちコラボ事業」。2018 年度までの 16 年間で 183 件の事業を支援し、京都のまちの活性化に貢献している。 11.「働くってなんだろう？」「学ぶことの意味は？」高校生・大学生の学習意欲を高め、キャリア発達を促すための交流・対話の場となっている「高大社連携フューチャーセッション」。 12. 鴨川の環境保全意識を高めるため、「鴨川で映画上映」というユニークな発想は学生ならでは。「カモシネマ」の愛称で地域に愛される取組に。 13. “京都の大学すべてが君のキャンパス”。単位互換制度を活用した学生は 25 年間で 151,694 名。 14.「KyoTomorrow Academy」で日本語を学ぶ留学生交流イベントにて、芋ほりとおいしい焼きいも作り。初めてづくしの体験で日本の秋を味わう。 15. 2015 年度に創設された「留学生スタディ京都ネットワーク」。留学生誘致のための海外での京都留学フェアや留学生の生活・交流・就職サポートを展開。 16. 京都学生広報部が発信するウェブサイト「コトカレ」。2018年度は 165 本の記事を掲載。取材・執筆は試行錯誤の日々。 17. 老若男女が楽しめるハロウィーンパレードをメインに、まちの人々のつながりを取り戻す「Halloween in 西院」。 18. 商店街に活気を取り戻したい。学生と地域の想いから開設された「淀本町商店街ふれあいライブラリー」。

大学コンソーシアム京都に膨らむ期待

大学コンソーシアム京都の設立 25 周年を心からお慶び申し上げます。

10 周年記念誌にも寄稿の機会を頂き、「大学のまち・京都 21 プラン」の策定に京都市行政の立場から携わらせていただいたこと、このプランには「大学」の存在を正面に据えた新しい町づくりの貌（かたち）を京都から示していきたい、そんな思いを込めたということを書かせて頂きました。市民の 1 割を占める大学生の多くがもしかしたらお客様として 4 年間を過ごし、京都の町を通過していってしまっているのではないか。とても勿体ない、市民としてきちんと遇することを考えよう。京都市行政としてはこれが大きな問題意識だったと思います。こうした視点は、設立以来今日まで、大学コンソーシアム京都の活動の中で明確に位置づけられていますが、特に第 4 ステージに至って多様な事業が具体的に展開されておりとても心強く感じております。

大学のまち・京都 21 プランの策定や大学コンソーシアム京都の設立が検討されていた頃に比べて、若者の意識は大きく変わったように思えます。

内閣府は、国民の生活意識に関する調査を毎年度実施しており、その中に現在の生活に対する満足度についての問いがあります。2018 年度の調査ではこの項目に対して 20 代若者の 81.7％が「満足（まあ満足も含めて）」と答えています。10 歳刻みで各年齢層を比較すると各年齢層を抑えてトップという結果です。ちなみに 1988 年の調査で満足と応えた 20 代は 64.1％でした。

この結果についてある社会学者は若者たちが将来に夢を見ることを諦めた結果だとしています。親世代を襲った嵐のようなリストラ、非正規雇用が 4 割を占めるという雇用の実態、人口減少の中で豊かさを生み出していく道筋が示されていない現状など、確かに今の日本は若者に将来を諦めさせる状況にあふれています。こうした状況を変えることがこの国の大きなそして解決を急がれる課題であることは明らかです。

生活の現状に満足しているという状況とは、ああなりたい、こんなことをやってみたい、あれを手に入れたいというコトやモノをあまり持ってないという状況です。身の回りにあふれかえっているモノはともかくとして、この 30 年間の変化の中で若者たちが自分の将来設計の中に取り入れてみたいと思うような面白いコトに出会う機会が減少してしまったことがこの調査結果に反映されているといえないでしょうか。若者を取りまく日本の状況を変えることは、京都の行政や大学の手に余る課題です。けれども面白いコトに出会う機会を数多くつくること、これなら大学と地域が手を結ぶことによって変えていける課題のように思います。多彩な得意分野を持つ京都の大学群が手を結ぶ、そして多様な文化や産業あるいは市民の暮らしという集積を豊富に持つ京都のまちと手を結ぶ。こうして出来た大学コンソーシアム京都の事業に参加することによって得られる様々な共感や感動、あるいは小さな成功体験の積み重ね、これらは面白いコトとの出会いそのものに違いありません。8 割を超える若者が現状を良しとし、その延長線上に人生の将来設計を作っていくであろうという今の閉塞した状況を変えていくこと、大学コンソーシアム京都の重要な役割だと思われます。こうした視点で様々な事業の一層の推進に期待したいと思います。

インターンシップがこうした取組の中で重要な役割を果たすことは明らかです。すでに大学コンソーシアム京都では、就職活動としてのインターンシップではなく、大学における学びの一環として位置づけて制度の充実に取り組んでおられます。インターンシップがますます就職活動に組み込まれる方向に動いている中、ぶれずに着々と進めていっていただきたいと思います。

「働く」の中身に関して京都はおそらく世界一多様な都市でしょう。私が勤務している国立京都国際会館も COP3 を始め多くの国際会議を誘致し、その運営をサポートしてきた経験を活かしてインターンシップの場を提供出来ると思っています。ただ、有効なカリキュラムづくりや受け入れ体制の構築など 50 人規模の当会館にとってなかなかハードルは高いというのが率直なところです。他にない特色を持つ職場は京都にたくさんありますが、その多くは当会館と同じようにハードルを超えるのに難儀しておられるのではないでしょうか。こうした企業と大学関係者との窓口となることも、大学コンソーシアム京都に期待したい役割の一つです。

25 年前、多くの大学関係者の熱い思いが一つになって生まれた大学コンソーシアム京都。常に時代を先駆けてきたこの取組はますます重要性を増しています。次のステージに向かって歩き始めようとするいま、改めて大きなエールをお送りしたいと思います。



公益財団法人
国立京都国際会館 館長
内田俊一
Shunichi UCHIDA



内閣府事務次官、消費者庁長官（初代）を歴任。
1990 年～ 95 年 旧建設省から京都市へ出向し、企画調整局長、助役として大学政策を担当、日本初の長期的大学政策ビジョンである「大学のまち・京都 21 プラン」の策定を主導。

大学コンソーシアム京都
設立 25 周年に寄せて

大学コンソーシアム京都は、日本ではじめて設立された大学間連携組織です。東京、大阪、愛知など、京都よりも多くの大学が立地する地域はありますが、京都は市内に大学・短期大学が集積している大学都市であり、当時から大学同士の交流も盛んで、各大学の学長が顔を合わせる機会が多くありました。大学コンソーシアムを立ち上げるには、京都は最も適した地域であると言えるでしょう。

組織設立に当たってのビジョンは、いくつかの大学と京都市が中心となって描かれました。京都市にとっては、大学が集積している京都市内において、個別大学への支援をしづらい状況があったのかもしれません。大学が連携した組織をつくり、京都の大学全体を底上げする支援を行いたい京都市の思いと、土台として根付いていた京都の大学間のつながり、そこに当時の高等教育の方向性が合わさり、1994 年 3 月に大学コンソーシアム京都の前身である「京都・大学センター」が発足しています。

私が大学コンソーシアム京都の理事長に就任した 1998 年 6 月は「財団法人」として認可されて間もない時期でした。それから 2012 年 6 月まで、約 14 年間、理事長として京都地域と大学、高等教育の発展に努めてまいりました。全国に先駆けた大学コンソーシアムとして、「私たちの前に道はない。後ろに道ができるのだ」という意気込みを原動力に、ただひたすらに駆け抜けたように思います。前身の京都・大学センター時代から取り組まれていた単位互換事業や FD 事業、生涯学習事業の継続実施に加えて、インターンシップ事業や京都国際学生映画祭、高大連携事業、京都学生祭典、SD 事業、地域連携事業、国際事業など、今なお続いている取組の基盤をつくり上げ、全国の大学コンソーシアムで唯一の「公益財団法人」への移行まで実現することができました。文部科学省が大学コンソーシアム京都を全国に向けたモデルとして推奨していることからも、これらの取組が高く評価されているものと自負しています。

理事長就任当初は、同志社大学の新町キャンパスに事務局がありました。その後 2000 年 9 月にキャンパスプラザ京都が竣工し、同時に事務局が移転、現在と同様の業務体制が整いました。職員が各大学からの出向者で構成されていることも大学コンソーシアム京都の特徴で、大学側が人材育成・人材交流の多様性や、事業の企画・運営を通して得ることのできるメリットを理解しているからこそ、現在も継続できています。

キャンパスプラザ京都は、京都駅から北西に徒歩 5 分程度という好立地で、京都市が建設に当たり、用地の確保等に多大なるご尽力をされました。京都駅前に施設を建設したことで、大学、学生だけでなく、京都市民にも大学の知的財産や市民サービスを広く提供する場となり、京都市にとっても、大学政策、地域政策を行っていく拠点としての機能が高まったといえます。また、大学側の視点に立つと、大学コンソーシアムの特徴である個別の大学では実施できないスケールメリットを活かした取組の展開が、京都駅前に立地することでさらに充実しています。例えば単位互換事業では、従来どおり学生がキャンパス間を相互に移動しながら講義を受けることを基本としながらも、各大学の教員がキャンパスプラザ京都で出前授業を行うこともあり、当時は珍しい取組とされていました。

各大学が連携して事業を展開していく中で、自分たちが京都という共通の基盤の上で教育事業を行っているのだと、多くの大学があらためて実感していたことと思います。大学が単純に集まっているだけではなく、京都は自分たちがよって立つ「土壌」なのです。お互いの根が絡み合いながら、京都をベースに養分を取り入れ、土壌から豊かにしていく。そしてそれが各大学の、社会全体の発展につながっていく。まさに、大学、学生、京都市、市民の四方良しの取組であり、大学にとっては人員の負担はあったものの、それを上回る大きなメリットを得ていることを強く感じています。

今後の課題として、少子化が進行していく中で、経営状況が悪化する大学の増加が懸念されます。大学コンソーシアム京都の対応が求められるときが来るかもしれません。国でも大学等連携推進法人（仮称）制度の検討や国立大学においてアンブレラ方式で 1 法人に複数大学の設置が可能となるなど、すでに変化が起きています。

設立25年を迎えた今、全国をリードする大学コンソーシアムとして、京都が果たしていくべき役割は何なのか。社会の変化を読み取り、今一度議論していく必要性が高まっています。大学コンソーシアム京都の今後のさらなる発展を期待しています。



学校法人同志社
総長・理事長
八田英二
Eiji HATTA

1998 年～ 2012 年（公財）大学コンソーシアム京都理事長。
同志社大学長、一般社団法人京都経済同友会幹事などを歴任。
現在は、政府省庁や自治体の各種委員や、公益財団法人日本高等学校野球連盟会長を務める。

写真・同志社大学提供

大学コンソーシアム京都のこれまでの歩み

京都市により提唱された「大学のまち・京都 21 プラン」をもとに設立された大学コンソーシアム京都。以来、「大学のまち・京都」を推進する基盤として地域と大学の連携、大学間連携、産官学連携の中で多様な取組を展開してきました。
ここでは、これまで策定してきた中期計画「ステージプラン」を基に、事業の変遷を振り返るとともに、第 5 ステージを迎えたこれからの展望について紹介します。

1st stage 第 1 ステージ 1994 >>> 2003

産官学が参加する知的な連携型教育・研究事業の基盤整備

1. 単位互換、シティカレッジ等の大学間教育交流の本格化
2. インターンシップ、リメディアル教育等の先進的な教育プログラムの策定・実施
3. 委託研究費をもとに大学間・地域社会からの参加を得て推進した京都学研究
4. 京都学生祭典などの学生交流の組織的な始動・展開
5. 京都の大学「学び」フォーラムを通した京都の大学教育の組織的な広報活動の推進



2000
京都市大学のまち交流センターが完成



2003
京都学生祭典スタート



KYOEN SODEFURE

2nd stage 第 2 ステージ 2004 >>> 2008

世界に誇る学術文化都市・京都の形成

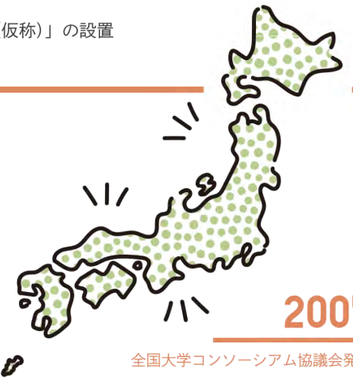
1. 世界に通用する新たな高等教育論の構築と教養教育としての単位互換制度の充実
2. 産官学連携・学術共同研究の高度化と高度な生涯学習システムの確立
3. 公的資金の獲得と京都ならではの次世代リエゾン・オフィスの確立
4. 世界に誇る学生交流都市の創設
5. 「大学都市・京都を考える懇談会（仮称）」の設置

2004
ロゴ完成

公益財団法人 大学コンソーシアム京都
The Consortium of Universities in Kyoto



2004
学まちコラボ事業スタート



2004
全国大学コンソーシアム協議会発足

3rd stage 第 3 ステージ 2009 >>> 2013

「大学のまち京都」ならではの新しい地域連携モデルを活かした高等教育の質の向上

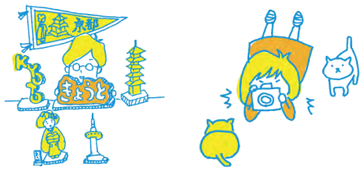
1. 地域性を活かした大学間連携による教育の質の向上と新たな教育プログラムの開発
2. 「大学のまち京都」をリードする学生の育成
3. 教育力向上のための FD・SD 事業の充実と地域ネットワークの推進
4. 加盟大学・短期大学の個性・魅力を活かした機能的な「ミニ・コンソーシアム」の形成
5. 「京都・ワンキャンパス」の国内外への発信
6. 京都高等教育研究センターでの共同研究による京都の魅力の追求





2009
SD ガイドブック創刊

2010
短期留学プログラムスタート（メルボルン）



コトカレ



2015
京都学生広報部創部
コトカレ開設

4th stage 第 4 ステージ 2014 >>> 2018

京都地域における学生の「学びと成長」の支援をめざして

1. 大学間連携による教育プログラムの充実
2. 大学の発展を支える教職員の育成
3. 大学のまち京都・学生のまち京都活性化
4. 国際交流プログラムの充実
5. 調査・研究機能の再構築



Nijo-jo



Kiyomizudera

2015
京都世界遺産 PBL 科目開講

1994 >>> 2018

第 1 ステージ
1994 1995 1997 1998 2000 2001 2003
・「京都・大学センター」発足
・単位互換事業開始
・第 1 回 FD フォーラム開催
・「シティーカレッジ」（現：京カレッジ）開始
・インターンシップ事業開始
・京都市大学のまち交流センター（キャンパスプラザ京都）完成
・京都国際学生映画祭開始
・大学職員共同研修事業開始
・京都学講座開講
・第 1 回京都学生祭典開催
・第 1 回 SD フォーラム開催
・第 1 回高大連携教育フォーラム開催

第 2 ステージ
2004 2005 2007
・大学地域連携モデル創造・支援（学まちコラボ）事業開始
・全国大学コンソーシアム協議会発足（事務局運営）
・大学コンソーシアム京都ロゴマーク制定
・ノートテイカー養成講座開講
・特定公益増進法人の認可を受ける
・第 1 回政策系大学・大学院研究交流大会開催
・「京カレッジ」（前シティーカレッジ）開講

第 3 ステージ
2009 2010 2011 2012 2013
・京都 FDer 塾開始
・まんが FD ハンドブック創刊
・SD ガイドブック創刊
・京都 FD 執行部塾開始
・公益財団法人 大学コンソーシアム京都移行認定
・学生短期留学プログラム（メルボルン）開始
・新任教員 FD 合同研修開始
・「e-ラーニング科目」開講
・高大連携事業「Kyoto カタリ場」開始
・公式 Facebook ページ開設
・高大社連携キャリア教育プログラム開始
・教職員対象 英語スキルアップ研修開始
・高等教育イベントナビ「教まちや」開設

第 4 ステージ
2015 2016 2017
・単位互換事業「京都世界遺産 PBL 科目」開講
・「留学生スタディ京都ネットワーク」設立（事務局運営）
・SD ゼミナール開始
・京都学生広報部創部
・京都学生広報部ウェブサイト「コトカレ」開設
・「KyoTomorrow Academy（京トゥモローアカデミー）」発足
・「関西障がい学生支援担当者懇談会（KSSK）」事務局運営開始
・京都 B&S プログラム開始
・京カレッジ「大学リレー講義」開講
・「学まち連携大学」促進事業開始
・大学・地域連携サミット開始
・大学コンソーシアム京都をプラットフォームとする文部科学省「私立大学等改革総合支援事業（タイプ 5）」の申請が採択

第 5 ステージへ

5th stage 第 5 ステージ

これからの取組　2019 ›››› 2023

25 年の節目となる 2019 年度にスタートする第 5 ステージ（2019 ～ 2023 年度）では、地域コミュニティや経済団体、自治体との相互連携の強化に重点を置き、京都地域の大学･短期大学の「個性」と「特色」を活かした取組の展開により、多様な「学び」を求めるすべての人々の期待に応えていきます。

さらに、その先の展開も見据え、中長期的な視点からも取組を進め、社会をリードする人材の育成と「大学のまち京都」のブランド力向上を図り、京都地域全体の発展に寄与して参ります。

事業の推進に当たっては、これまでの取組を踏まえ、6 つの柱を設けました。以下に示すように、5 つの事業推進方針を意識しながら各事業を展開し、多様なニーズに対応することで、第 5 ステージのビジョンである「だれもが学び、つながる京都（まち）へ」の実現を目指します。

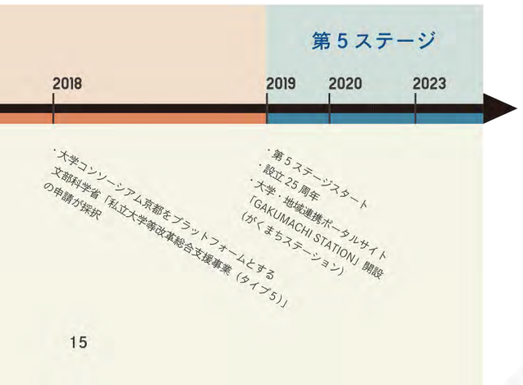
第 5 ステージのビジョン

だれもが学び、つながる京都（まち）へ

～地域とともに個性と特色を活かした多様な学びの展開～

第 5 ステージの事業推進方針

- 加盟校ニーズ・期待に応える事業運営
- 大学と地域との連携推進
- 交流・プラットフォーム機能の強化
- 「大学のまち京都」のブランド力向上
- 高等教育を取り巻く環境の変化に対応する、先進的で独自性のある事業展開



第 5 ステージの事業

柱 1　大学間連携による学びの提供と充実

- 単位互換事業
- インターンシップ事業
- 高大連携事業
- 生涯学習事業

柱 2　大学教職員の能力開発と交流機会の充実

- FD 事業
- SD 事業
- 障がい学生支援事業

柱 3　大学の枠を超えた学生間の交流・活動支援

- 京都学生祭典
- 京都国際学生映画祭
- 京都学生広報部
- 京都から発信する政策研究交流大会学生実行委員会

柱 4　オール京都での国際交流推進

- 留学生誘致・支援事業
- 学生の海外留学・交流促進事業
- 教職員のグローバル化支援事業

柱 5　大学・学生・地域社会との連携による京都地域の発展と活性化

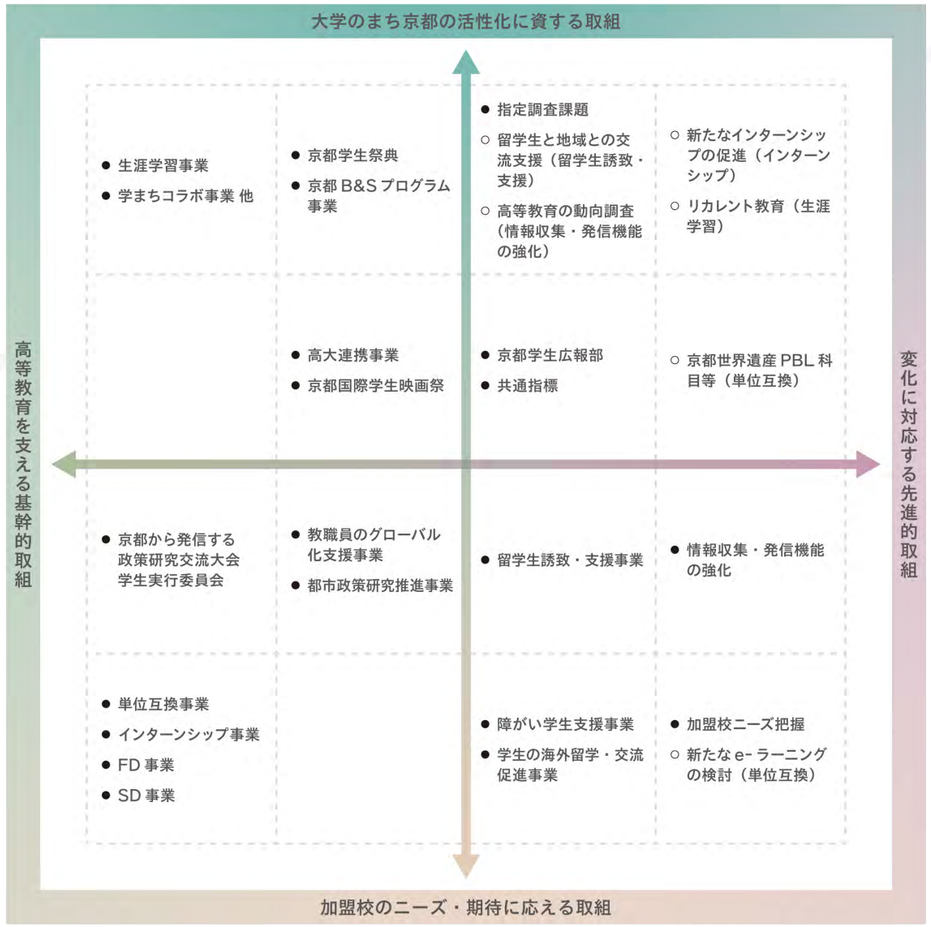
- 地域連携事業
- 都市政策研究推進事業
- 京都学生広報部（プロモーション活動）
- 京都 B&S プログラム事業（プロモーション活動）

柱 6　高等教育の環境変化に対応する組織運営

- 加盟校ニーズ把握
- 情報収集
- 発信機能の強化
- 共通指標
- 指定調査課題

事業展開のイメージ

第 5 ステージにおける事業展開のイメージ。基幹的取組と先進的取組、加盟校支援と京都活性化の 4 つの方向性を軸に、幅広い事業を展開していきます。（●は第 5 ステージ主要事業、○は事業において特記すべき取組を示す。）



Pick UP　第 5 ステージの特徴的な事業を一部紹介！

高大連携事業

高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜を一体的に改革する高大接続改革。「大学入学共通テスト」の開始など、大学・高校にとって大きな変革の時期を迎えています。

加盟校･各高校の課題やニーズを踏まえ、「高大連携フォーラム」･「高大社連携キャリア教育企画」の充実のほか、学校や設置者の別を越えて集う教職員交流企画を実施します。

リカレント教育

「人生 100 年時代の到来」の影響もあり、18 歳を中心とする人口層だけでなく、職業人や社会人が学びつづけるための「リカレント教育」の整備が大学への社会的要請であり、重要な課題となっています。

これまで取り組んできた生涯学習事業の「京カレッジ」において、職業人・社会人の継続的に学ぶ場としての大学教育への発展と、京都地域でのリカレント教育の促進に向けた新たな取組を展開します。

留学生誘致・支援事業

「留学先としての京都」の認知度・ブランド力の更なる向上に向け、これまでの取組の検証・改善を行い、観光と連携した「学びのまち」の情報発信など、より効率的・効果的な留学生誘致プロモーション活動を行います。また、日本人学生や地域と留学生との交流、就職、日常生活への支援を充実させ、京都で学ぶ留学生の満足度を高めるなど、オール京都による留学生の誘致・支援体制の強化を図ります。

障がい学生支援事業

これまでの取組に加えて、大学において障がい学生支援に関わる多様な立場の教職員が意見交換する場や、大学の障がい学生支援担当者と高校の教員が意見交換できる高大接続の機会を設けます。これによって、障がいのある高校生が大学へ進学しやすい環境を創るなど、大学間連携組織ならではの新たな方向性を盛り込んでいきます。

「今・昔・未来」メモ

大学コンソーシアム京都の「今・昔・未来」。設立当初から続く取組がどのように進化し、未来につながっているのか写真とイラストから読み解きます。







単位互換事業

Credit Exchange System

1994年に28大学・短期大学51科目、延べ出願者数1,915名でスタートした単位互換事業は、今や45大学・短期大学が協定し、400 科目以上が開講されており、2018 年度までに延べ 1,571,694 名が受講した。2015 年度からは京都の世界遺産をフィールドに PBL を展開する「京都世界遺産 PBL 科目」を開設。2020 年度からは京都の特徴的なミュージアムでの新たな科目開設を計画しており、今後も単位互換から目が離せない。







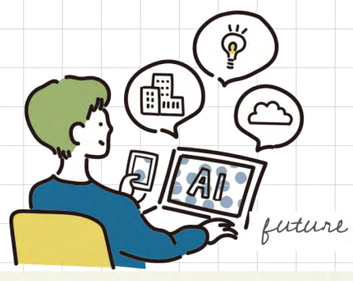
インターンシップ事業

Internship

1998年に200名の実習生、73の受入先企業・団体とともにインターンシップ事業はスタートした。今は、10 日間以上の実習をする就業体験型のビジネス・パブリックコースと約5ヶ月間にわたり、受入先企業等の課題解決にとりくむ成果重視型の長期プロジェクトコース（プログレスコース）の「教育プログラム」として、毎年 30 以上の大学から約 300 名の学生が出願し、200 以上の受入先企業・団体の中で行われ、これまで延べ 9,300 名の修了生を送り出している。学生の社会人基礎力の育成のみならず、受入先も元気にできるような、京都地域全体での人材育成と社会活性化を促進するより良いプログラムにすべく着々と進行中。







FD・SD 事業

Faculty & Staff Development

設立当初はFD事業のみであったが、早々にSD事業にも着手した。2017年4月にSDが義務化されるなど、これまでの事務職員研修から大学全体の教職員研修への移行が求められている。次世代の大学運営を主体的に担う職員の育成のための SD 事業の充実は、FD 事業の充実とともに、財団が担う役割は大きい。







京都学生祭典

Kyoto Intercollegiate Festa

2000 年に開催されたキャンパスプラザ京都のオープニング・イベント「京都・学生フェスティバル」。この時の実行委員会形式がベースとなり、京都学生祭典へと発展。現在は「京炎 そでふれ！」が定着し、趣向を凝らした演出を楽しみに毎年来場する観客も。「京都四大祭」になる日を目指して、学生実行委員は１年をかけて活動している。今も昔も、そして未来も学生の可能性は無限に広がっている。







国際事業

International Affairs

加盟校の国際交流を支援するため 2015 年に設置された国際事業部。「国際都市・京都」を PR するべく、職員は国内外を問わず飛び回る。外国人留学生の誘致や日本人学生の海外留学促進の他、教職員のグローバル化支援など、事業は多岐にわたっている。京都で学んだ留学生が京都の企業へ就職し、国際社会では多くの日本人学生が活躍中。







会報

Newsletter

京都・大学センター設立当初から発行し続けている会報誌。加盟校に対する情報発信だけでなく、加盟校の公開講座や魅力を市民に伝える役割も担っている。時代やデザインが変わっても「大学コンソーシアム京都の取組をわかりやすく伝える」というコンセプトは変わらない。今後も会報を手にとられた際は是非ご覧いただきたい。なお、本誌は会報 50 号でもある。

OLD ▸ NOW ▸ FUTURE

大学コンソーシアム京都
事業の全体像

6 事業部の多様な取組をご紹介します。

Overview

1 Academic Affairs 教育事業部

ここにしかない「学び」を

大学コンソーシアム京都設立当初から続く単位互換や京カレッジ、インターンシップといった、高等教育を支える基幹的取組を行っています。

単位互換事業

加盟校の学生は、大学間協定のもと他の加盟校の特色ある科目を受講できます。京都の大学すべてが、さらには世界遺産までもが京都で学ぶ学生のキャンパスとなります。キャンパスはこれからもますます大きくなります。

生涯学習事業（京（みやこ）カレッジ）

さらに高度化・多様化する社会人からの学びのニーズ。それに応えるため、加盟校の特色ある正規の授業や公開講座の市民への提供から、生涯を通して学びたいときに学べる大学教育の推進を目指します。

インターンシップ事業

大学コンソーシアム京都のインターンシップは、全国に先駆けて1998 年からスタート。就職活動ではなく、大学における学びの一環として行う、学生自身が「進化する」プログラムとして実践から「働く」を考え、社会人基礎力を育成しています。

2 Educational Development 教育開発事業部

今後の教育を考える

大学を運営する教職員の能力開発のため、様々なプログラムを企画、運営します。また、2003 年からは高大連携事業にも取り組んでいます。

FD（Faculty Development）事業

教員の教育力向上と大学の組織的教育改善のため、「FD フォーラム」をはじめ、マクロ層、ミドル層、ミクロ層といった階層別の FD 研修事業を展開しています。

SD（Staff Development）事業

大学を取り巻く環境が急激に変化する中、大学職員の担う役割は非常に大きなものとなっています。管理運営から教育・研究支援まで、多様なプログラムで資質向上を図ります。

高大連携事業

高校、大学にとって大きな変革期を迎える中、課題やニーズなどを踏まえ、情報発信や交流の場となる企画、高校生・大学生のキャリア発達につながる企画を展開します。

3 Student Support 学生支援事業部

エネルギッシュな学生と京都を盛り上げる

京都学生祭典や京都国際学生映画祭といった大規模のインターカレッジの活動の支援や、大学間連携組織だからこそできる障がい学生支援に取り組んでいます。



京都学生祭典

2003 年に始まった、学生の力でつくりあげる一大イベントです。「京炎 そでふれ！」の出前教室や地域のイベントへの協力など、一年を通じて様々な活動で京都を盛り上げています。

京都国際学生映画祭

学生実行委員が運営する日本最大級の国際学生映画祭です。30 を超える国と地域から、600 近くの作品が集まります。京都において、世界中から集まった多くの才能が交わり、可能性を広げていきます。

障がい学生支援

この分野においては現状、高等学校等と大学とのつながりは少ないため、それぞれの教職員が情報交換、交流できる場をつくります。2016 年 4 月の「障害者差別解消法」施行もあり、加盟校から高いニーズがあります。

4 International Affairs 国際事業部

京都から世界へ　世界から京都へ

2015 年度の事業部設置以降、加盟校の国際交流支援として、留学生の就職・日本語学習支援や日本人学生の海外留学の促進、教職員対象の研修の実施等、幅広い事業を展開しています。



国際連携事業

単位互換によるメルボルンへの派遣や、教職員や学生の語学研修を実施。加盟校の国際化に向けてプログラム内容の充実を図ります。

留学生スタディ京都ネットワーク事業

京都留学総合ポータルサイト「Study Kyoto」や SNS を活用しての情報発信、「京都留学フェア」の開催など国内外での誘致プロモーションを行い、「留学先としての京都」の認知度向上に取り組むなど、留学生の誘致支援を図ります。

留学生就職支援・交流コミュニティ事業

京都地域の留学生の就職・日本語学習・交流の支援に取り組むとともに、地元企業の国際化を支援しています。



5 Resarch and Communication 調査・広報事業部

可能性を育み、活かす

大学・地域連携事業や都市政策研究、調査・研究、広報事業など様々な事業に取り組んでいます。

地域連携事業

学まちコラボ事業や「学まち連携大学」促進事業など京都における大学・学生 × 地域連携の取組の一層の活性化を図ります。

都市政策研究推進事業

京都の財産である「大学の知」や「学生の活力」を地域課題の解決や活性化に活かします。

「京都から発信する政策研究交流大会」では、学生による地域課題の解決に向けた研究成果を発表する場を設け、広く発信しています。

調査企画事業

高等教育が転換期にある中、加盟校や大学コンソーシアム京都における情報収集・分析は重要です。指定調査課題の調査研究成果の活用による事業見直しの他、国の高等教育施策の動向を把握し、新たな施策展開を図ります。

広報事業

会報やウェブサイト、SNS 等を活用して、大学のまち京都の魅力や、加盟校に有益な情報を発信します。また、京都学生広報部の活動を、大学コンソーシアム京都のプロモーション活動に位置づけ、「コトカレ」を通じたリアルな京都の情報を全国の中高生に発信します。

6 General Affairs 総務部

組織全体を支える

庶務、財務、施設管理など組織の運営を支えています。

全国大学コンソーシアム協議会事務局運営

国内 48 の大学コンソーシアム組織からなる協議会の事務局を担当しています。

勤労学生援助会事務局運営

家庭からの援助が困難で、学費や生活費をアルバイトや奨学金に頼る加盟大学の学生へ毎年奨学金を提供する「勤労学生援助会」の事務局を担当しています。

施設管理事業

京都市からキャンパスプラザ京都の指定管理者として指定を受け、管理・運営を行っています。



ここにしかない学びを

大学コンソーシアム京都が展開する基幹的取組から
単位互換・京カレッジ・インターンシップの
受講生の声をご紹介。

京都世界遺産 PBL 科目「清水寺 × 立命館大学」での授業風景

〈単位互換制度〉
京都世界遺産 PBL 科目

京都の世界遺産をフィールドに PBL(※1) を展開する科目が「京都世界遺産 PBL 科目」です。本科目は、科目を開講する大学と「明日の京都 文化遺産プラットフォーム」(※2) と大学コンソーシアム京都が協力して運営しています。授業では、主にグループでの学習を通じて、世界遺産やその周辺地域が抱える課題を自らで発見し、解決案を提案します。他大学の学生と協力しあいながら、世界遺産の関係者との対話を通じて課題解決に取り組むという、京都ならではの単位互換科目です。

※1　PBL (Project Based Learning) とは、課題発見・解決型の能動的学習のことです。

※2　明日の京都 文化遺産プラットフォームとは、京都の「文化遺産」を後世へ継承し、未来にむけた新たな文化創造を目的とした、京都の世界遺産所有者、自治体、大学他による団体です。

受講生の声

醍醐寺 × 龍谷大学

「コミュニティマネジメント特論」を受講



龍谷大学
社会学部 卒業
徳田 舞美さん
(とくだ・まみ)

今しかできない学びがある

京都世界遺産 PBL 科目が発足された当時から４年間、様々な形で学びを得ました。１年目は受講生として、２年目はメンターとして、３年目はOG として、そして４年目はまたメンターとして。メンターは先生と受講生の間に立ち双方のサポートを行います。

私は「教室でただ座って学ぶのでなく、実際に現場に行き自分の目で見て感じたことを学びたい」という想いで PBL 科目を受講しました。１年目の受講生のときは、世界遺産・醍醐寺に何度も足を運び、醍醐寺にかかわる人たちが活動や物に込めた祈りを可視化したポストカードを制作しました。醍醐寺について何も知らないところからのスタートでしたが、授業の一環で醍醐寺にて合宿を行い、僧侶の方の個別講座やインタビューを通して現場でしか分からないことを学び、醍醐寺と学生がともに課題解決に取り組みました。メンターや OG の立場では、異なった視点から物事を考えることができました。とりわけ、その一歩先にある解決策の予測、サポートしなければならない行動、目の前にある課題だけはなく課題を取り巻く全体を考えられるようになりました。

この PBL 科目を通して醍醐寺について学んだことはもちろん、人と丁寧に接することや、多様な物の見方など、これからの人生で役立つ学びも多くあります。私が４年間継続できたのは「今しかできない学びがある」と感じたからです。京都世界遺産の現場で、大学や学年の壁を超えた学生と一緒に取り組む活動には、それまでとちがう想像できない出会いや学びがあふれています。京都で学ぶ学生の皆さんには自分の「やってみたい」という思いを大切に、是非挑戦してほしいと思います。



上賀茂神社 × 京都産業大学
(2015～)



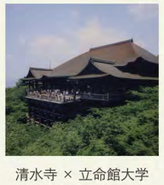
東寺 × 京都市立芸術大学
(2015)



醍醐寺 × 京都橘大学
醍醐寺 × 龍谷大学
(2015～)



二条城 × 同志社大学
(2015～)



清水寺 × 立命館大学
(2015～)



仁和寺 × 立命館大学
(2015～)



比叡山延暦寺 × 京都文教大学
(2016～)

京都世界遺産 PBL 科目の詳細は特設サイトをご覧ください。
http://www.consortium.or.jp/special/wch_PBL/index.php

〈生涯学習制度〉
京カレッジ



京都市と大学コンソーシアム京都が主催する社会人を対象とした生涯学習事業です。大学の正規科目の受講や単位取得が可能であり、また大学の開設する各種の市民教養講座が受講できます。2018 年度は加盟校より 270 科目以上が提供され、延べ約 1300 名が受講しました。

中でも「京都学講座」は 2001 年度から開講されており、京都特有の歴史と伝統文化を毎年違う角度から取り上げた、京都ならではの講座として市民の高い人気を得ています。また、2016 年度から開始した「大学リレー講座」は、加盟校の特色ある生涯学習の紹介を含めた講座として、宗教・歴史・文学から健康・自然科学にわたる幅広いテーマで行われており、多くの市民に活用されています。

受講生の声

京カレッジ科目を長年にわたり受講



伊藤 昭さん
(いとう・あきら)

学びの場の提供に感謝

私は、第１の職場の定年を期に、来し方を振り返り、残りの人生を有意義に過ごすにはどうすればよいかと考えてみました。そして、第２、第３の仕事をしながら、ボランティア活動と生涯教育に的を絞りました。学びの場の軸は制度的・組織的に優れていると評価されている大学コンソーシアム京都（キャンパスプラザ京都）にしました。

大学コンソーシアム京都に結集する多くの大学が、有料・無料の公開講座・講演会を京都市民に開いていることは、京都に於いては最早文化になっています。他都市に約５年間住んだことがありますが、いかに京都市民は恵まれているかを痛感しています。講義で印象深いのは、やはり京都らしい多彩な講座です。歴史と文化、祭り、本山や家元がたくさんある宗教、茶道、華道。私のボランティア活動を裏打ちする「戦争と平和論」、迫りくる超広域巨大地震に備える「災害論」と、その根拠となる「地球の科学論」、そして極め付きは、半期にわたる“人間国宝シリーズ”でした。

人間国宝による実演と実演映像が各10 分程と、お話（対話）があり、オーラを感じる誠に得難いものでした。(しかも受講料が安い！！)

振り返ってみた実感は、大学コンソーシアム京都の授業と、諸大学等の公開講座・講演会が充実していることの有難さと感謝の念です。明らかに満足度が高まりました。また、若い学生と一緒に学び、時として発言し、毎時間のリポート提出を求められたリレー講座もよい刺激になりました。ありがとうございました。

単位互換制度



単位互換制度とは、単位互換協定を締結している大学・短期大学（以下、大学）に所属する学生が、他の協定大学が開講する科目を履修し、修得した単位を所属大学の単位として認定される制度です。大学コンソーシアム京都の単位互換協定には、京都地域を中心に 2018 年度は約45の大学・短期大学が参加しています。講義形式の科目、実習や PBL を取り入れた科目、また、学生の幅広い関心や興味に応じて、文化、芸術、政治、経済、自然科学など、2018 年度では 420 科目以上が提供されました。

受講生の声

京都府立医科大学の開設科目を受講



京都女子大学
現代社会学部 ３回生
上白土 景子さん
(かみしらど・けいこ)

[科目名]　優しい看護学ー成人期における健康障害とその予防法
[開設大学]　京都府立医科大学
[テーマ]　生活・健康・スポーツを学ぶ

先輩から薦められて

先輩からの薦めでこの講義を知り、所属大学にない科目なので興味を持ちました。成人期における健康障害の特徴と予防法について学べる授業で、講師が実際に看護師だった経験に基づいたアドバイスなども聞くことができました。

病気の原因や予防法を知ることで、自分や身の回りの人が病気になった際の行動が以前よりも具体的に想像できるようになりました。ヘッドトリートメントなどの演習もあり、文系、理系に関わらず楽しく受講できたので良かったです。

インターンシップ



大学コンソーシアム京都のインターンシップは、大学と連携し「学習意欲の喚起」「高い職業意識の育成」「自主性・独創性のある人材育成」を目的に行う、大学における学びとして単位認定を行える教育プログラムです。1998 年度より全国に先駆けて開始しています。就業体験にとどまらない、実践から「働く」を考え、社会人基礎力を育成するキャリア教育として、受講生から高い満足度を得ています。特徴として、1）京都地域の多様な価値観を持つ大学・短大の学生交流、2）京都地域を中心とした企業・自治体・大学など 200 を超える就業実習の受入先、3）多様な大学の教員による少人数ゼミ形式学習を実施しています。

受講生の声

ビジネス・パブリックコースを受講



同志社大学
政策学部 卒業
森 一啄さん
(もり・いったく)

自分にもできるという自信

私は、大学３回生の頃はあがり症で人前で発言することに苦手意識があり、コミュニケーションが必要な接客業のアルバイトを避けていました。しかし、ゼミの先輩の卒業研究発表や、就職活動を意識しはじめたことから、この苦手意識を克服したいと思い、大学コンソーシアム京都のインターンシッププログラムに参加することにしました。

インターンシップ実習の前後にある講習では、基本的なビジネスマナーや自己分析について学び、また、自分の就職活動に対する考えをクラスのメンバーに簡潔にわかりやすく伝えるトレーニングもあり、勉強になりました。プログラムの最終日には、学生の代表として企業の方や協力いただいた方に御礼の挨拶をする機会も与えていただきました。このインターンシップ・プログラムを通して、苦手意識を克服するきっかけとなり、訓練すれば自分にもできるのだという自信にもつながったと思います。また、他の学生と考えを共有することや、グループワークの機会も多く、自分と他人を比較することで、一人で自己分析するだけでは知り得ない自分の強み、弱みがわかったことも大きな収穫でした。

私は、現在金融機関に就職し、苦手意識を持っていた接客業である窓口業務をしています。就活前の私からは想像もできなかった職種だと思います。入社式の代表職員挨拶まで務めさせていただきました。まだまだ訓練中ですが、これからも機会があれば積極的に挑戦するようにしていきたいと思います。

今後の教育を考える



高大連携事業

大学コンソーシアム京都の高大連携事業は、京都高大連携研究協議会（京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会、京都商工会議所、大学コンソーシアム京都）と連携し推進しています。同協議会発足の 2003 年以降、高校や大学のニーズを踏まえながらスクラップアンドビルドを図りつつ、様々な事業を展開しており、現在は、高大連携教育フォーラム、高大社連携フューチャーセッション、教職員交流企画の 3 つの事業を展開しています。

高大連携教育フォーラム

高大連携・高大接続に関する国内動向の情報共有や京都における取組の情報発信を目的として、毎年 12 月に開催しています。第 16 回（2018 年度）は次期高等学校学習指導要領に焦点をあてて開催し、300 名を超える方々に参加いただきました。
今後、2019 年度から「高校生のための学びの基礎診断」、2020 年度から「大学入学共通テスト」が導入され、2022 年度からは次期高等学校学習指導要領が年次進行で実施されるなど、高大を取り巻く環境がより一層目まぐるしく変化する中、本フォーラムでは、文教政策の動向や現場の課題に注視しながら、各校のニーズに応じたテーマ設定を図ります。

高大社連携フューチャーセッション

高校生の学習意欲の喚起、各校におけるキャリア教育の推進への寄与を目的として、2012 年度より「高大連携キャリア教育企画」を開始し、複数あった企画を 2018 年度より「高大社連携フューチャーセッション」に統合しました。高校生・大学生のキャリア発達を促すため、設定したテーマについて、高校生・大学生・社会人といった世代、学校を越えて対話する場を提供します。2018 年度は、「『働く』と『学ぶ』をどう繋げるか？」をテーマに京都市内で実施し約 40 名に参加いただきました。今後は、より多くの高校生・大学生のキャリア発達につながるよう、高校関係者とも連携しながら、京都府北部と京都市内で開催します。

教職員交流企画

「高大接続改革」が進められる中、各校が抱える課題の解決、教育改善に資するため、学校や設置者の別を越えて定期的に集い、工夫や悩みを共有し、解決に向けた交流ができる場を提供すべく、2018 年度から「京都高校教員交流会」を開始しました。高校教員間での交流に重きを置き、交流により得た発見や気づきを日々の授業改善に活かし、将来大学に進学する高校生の資質・能力の向上につなげることを目的としています。今後、大学教職員との交流も視野に入れた展開を図ります。



FD 事業

人生 100 年時代の到来など社会全体の構造の変化を背景にして、教育の質保証や学修成果の可視化、多様で柔軟な教育プログラムの編成、多様な教員の配置などが強く求められています。FD 事業では、マクロ層（執行部層）、ミドル層（教務委員等）、ミクロ層（個別教員）といった階層別の FD 合同研修プログラムと、大規模シンポジウム「FD フォーラム」を展開しています。

階層別 FD 合同研修プログラム

階層別の FD 合同研修プログラムでは、これまで、新任教員向けの研修を複数日程の短期集中プログラムとして実施してきましたが、2018 年度にアラカルト形式に改編したことにより、現場のニーズに合致し従来よりも多くの方々に受講いただきました。2019 年度からは、これまで以上に「学修者本位の教育への転換」が求められていく中、本 FD 合同研修を、これまでの成果を踏まえた上で、現場のニーズに応じてより一層柔軟に設計できるよう、研修体系を改編します。また、大学を越えて定期的に FD に関する課題や実践等を共有し、交流できる場を創出し、教員ネットワークの構築、ひいては教育改善につなげます。

FD フォーラム

当財団設立当初の 1995 年に開始し、国内でも有数の規模を誇るフォーラムとして定着しています。全国から毎回約 800 名の参加をいただいています。引き続き、高等教育を取り巻く環境の変化に注視しながら、現場のニーズに応じたテーマで開催します。



SD 事業

大学を取り巻く環境が急激に変化している状況において、大学職員が担う役割はますます大きくなり、また 2017 年から SD が義務化され、大学職員の能力開発・向上は必須となりました。そのような環境に適応すべく、大学職員を対象とした管理運営や教育・研究支援までを含めた資質向上のため SD ゼミナール、SD フォーラム、SD 共同研修プログラムを展開しています。

SD ゼミナール

将来の大学運営を自律的・主体的に担う職員の育成を目的とした連続的研修プログラムです。8 日間の講義と公開プレゼンテーションに加えて修了レポートの提出を求めます。

SD フォーラム

SD 分野で関心の高いテーマを設定し、基調講演および分科会における事例報告やワークを通じて、大学職員の能力向上や大学の枠を超えた情報交流の場を提供しており、毎年、全国から多くの大学職員に参加いただいています。これからも大学を取り巻く環境の変化を的確に把握し、タイムリーなテーマを設定し開催します。

SD 共同研修プログラム

職員の能力向上や大学業務の効率化・高度化を目的に実施している、1 日から半日の研修です。参加者同士、大学を越えた情報交換やネットワークづくりの機会としても活用いただいております。

エネルギッシュな学生と京都を盛り上げる

京都で輝く多彩な学生たち

ひとつの大学の枠を超え、京都を中心とした全国各地の学生と協力して京都を盛り上げるべく活動する学生団体があります。大学間をまたぐ「インカレ活動」（インターカレッジの略）に情熱を注ぐふたりの学生にその魅力をお聞きしました。



京都学生祭典実行委員

立命館大学 文学部３回生

山田怜奈さん（やまだ・れな）

イベント企画への興味や先輩たちの輝く姿に惹かれ、京都学生祭典の活動を始める。現在、副実行委員長。



京都学生映画祭実行委員

京都大学 教育学部２回生

岡野裕仁さん（おかの・ひろひと）

映画好きが高じて、京都国際学生映画祭の活動に参加。海外作品の字幕制作などを手がける。

■多様な学生が集まり、視点が増える

ーまずは、京都学生祭典がどんなものか教えていただけますか。

山田：私の所属する京都学生祭典実行委員会は、毎年10 月に平安神宮前・岡崎プロムナード一帯のステージで行われるイベントの企画・運営を行っています。毎年来場者が 10 万人を超えるほどの大きなイベントで、今年は17 回目の開催になります。

ーー大イベントですね！

山田：そうなんです、多くの大学から 200 名以上の学生が集まって活動しています。企画運営部や広報部、営業部など、７つの部署に分かれていて、私は、前年度本祭当日のオープニングやグランドフィナーレの企画を担当する責任者でした。

ー２回生のときに責任者とは、プレッシャーがあったでしょうね。

山田：はい、それは大変だったんですけど、でも悩んだときも部員が活発に意見を出してくれたんです。たとえば、「自分の大学ではこんな演出があったよ」なんてアイデアを持ち寄ってくれたので、部員一丸となって企画を練り上げることができました。



ーなるほど。京都国際学生映画祭はどうでしょう？

岡野：僕たちは、世界各地の学生が制作した自主映画を集めて審査し、京都で発信する国際的な映画祭を主催しています。前年度は、集まった 588 作品から、運営メンバーの 20 名とプロの映画監督が審査しました。その結果勝ち残った作品を上映し、グランプリを決定しました。

ー映画好きの学生が集まっているでしょうから、審査も盛り上がりそうですね。

岡野：そうですね、学生のバックグラウンドはさまざまなので、たくさんの評価の軸があることに驚きました。僕は脚本を中心に見ていましたが、ほかの学生は「この照明のあて方がいい」とか、「この長さのショットを撮る技術は優れている」など、撮影、演技、照明、音響などまったく異なる視点で映画を評価していました。そういう違いが大きな学びになりましたね。



■それぞれの力を持ち寄るからこそ

ーインカレ活動って、多様性があるから魅力なんですね。

岡野：ええ、見方だけでなく、さまざまなスキルを活かせるのも大きい魅力です。僕が担当しているのは、海外作品に日本語の字幕をつけること。ペルシャ語やクロアチア語などまったく未知の言語であっても、専門知識を学ぶ他大学の学生と協力して取り組んでいます。たくさんの人の力を借りると、僕ひとりではできないこともできるんです。

山田：そういう実感は、私にもあります。昨年（第16 回京都学生祭典本祭）、私が担当していたオープニングで実施した「おまねきパレード」で、学生によるエネルギー溢れるパフォーマンスを通じて、京都学生祭典の魅力を発信していきたいと考えていました。そこで、たくさんの学生団体に協力をお願いし、大学のバトントワリング部や和太鼓団体等、多くの学生団体に出演してもらうことができました。実行委員だけではできない、様々なジャンルの学生が集まったからこそ実現できる、活気ある、華やかなパレードを行うことができました。

岡野：あのとき、僕も会場で見ていました。パレード自体は短い時間だったのですが、その短い時間の中に凝縮された実行委員の皆さんの想いやエネルギーがあったのだろうなと、（映画祭の）本祭へ向けて長い時間をかけて準備をしていた当時の自分と重ね合わせて、想像していました。

山田：あれは出演してくれた学生の皆さんの協力があったからこそ、実現できたことだと思います。みんなでパレードを見ながら感激して泣いてしまいました。

岡野：大学コンソーシアム京都のみなさんをはじめ、多くの方々が学生の主体性を尊重してくださるんですよね。みなさんに支えていただけるからこそ、学生が主役になった活動ができているんだと幸せに思います。



■これからの京都を担うために

ー多くの方々に支えられての活動なんですね。活動を通して、どんな未来を実現したいですか？

岡野：この映画祭を、京都と世界の架け橋にしたいんです。海外からの参加学生は、自分の映画が京都から発信されるのは素晴らしい経験だったと話してくれます。世界中の学生作家が将来活躍するためのステップの場を提供したいと思いますし、それを日本の映画発祥地・京都から発信するのは意義があることだと考えています。

山田：日本のなかでは、京都は学生の街。たくさんいる学生の力で、京都を盛り上げていきたいです。京都学生祭典の活動をご覧になったみなさんが、「学生がこんなに頑張っているんだから私たちも」と思ってくださったら嬉しいです。みなさんが未来へ一歩踏み出せるような「明日へのきっかけ」を作っていきたいなと思います。

岡野：ふだんは別々の団体として活動していますが、京都を魅力的に発信したいという思いは共通でしたね。

山田：おたがいが京都を彩る存在になれるよう、精一杯頑張りましょう。

京都で活躍する
大学生たち

1

京都学生祭典
×
高山ひかりさん











京都との懸け橋

京都学生祭典で得たものはとても多く、それらを総括して表せる言葉は何だろうと考えていました。出会いや成長など、いろいろな言葉を考えているうちに『京都との懸け橋』という言葉が浮かびました。高校まで千葉県で過ごしていた私は、京都のことについてほとんど知りませんでした。京都をもっと知ろうと思ったきっかけを作ってくれたのが京都学生祭典です。

京都学生祭典実行委員会に加入したとき、私は大学の文化祭の延長だろうと考えていました。しかし、活動していくうちに、そんなに簡単なものではないと分かってきました。規模も企画内容も関わる人数や年齢層も全然違う。京都について自分から調べないと、何もできないと思いました。少しでも京都の知識をつけようと、京都の観光地やカフェを巡ったり、京都出身の友人と散歩したりしました。企画の提案や質問をされた際に、その経験を自分の知識として活かすことが出来ました。

2回生になって、食企画の責任者になったとき、京都の漬物企業とのコラボレーションの話が来ました。地元の方々が学生に協力してくれるまち、京都をすごいと思いました。大学の料理サークルやボランティアの方々が考案した漬物を使用したレシピを、当日調理・提供してもらい、来場者による投票でグランプリを決める企画を実施しました。当日、滞りなく進むように準備・運営を精一杯行いました。

3回生は、2回生が考えたイベントをフォローする立場だったので、どんな会場があるのか、周りには何があるのか、地域について様々なことを調べて、一緒に企画を考えました。ただ京都に来ただけの学生ならば、京都のことについてこんなに深く知ることはなかったと思います。

このように私にとって京都学生祭典は京都について知る懸け橋になりました。京都学生祭典を 3 年間やり続けたから、たくさんのことを学び、周りの人に京都の魅力を伝えられるようになったと思います。京都に来て悩むことも多くありましたが、京都学生祭典があったから、楽しい毎日を過ごすことが出来ました。この経験は私の大学生活の中で、とても重要なものになり、これからの人生の基盤になっていくと思います。

たかやま・ひかり
京都女子大学 家政学部 4 回生

自分のやりたいことができる大学に進学したいと思い、千葉から京都の大学に進学。生徒会役員を務めていた経験から、イベントを企画・運営することに魅力とやりがいを感じ、京都学生祭典実行委員会への加入を決める。

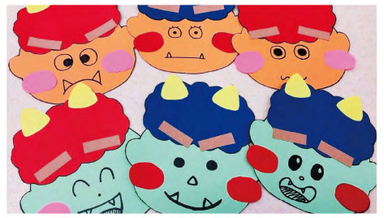
京都で活躍する
大学生たち

2

京都への留学
×
プラット カトリーナさん











私と「そら」のかかわり

京都にお住まいの方なら、近くのお店で外国人がバイトをしているのを見かけたり、大学の近くで留学生らしき外国人がいることに気がついたりしたことがあるでしょう。京都には現在約13,000名もの留学生がおり、毎年増え続けています。ところで、留学生たちは日々、どのような生活を送っているかご存知でしょうか。そこで、一例として、留学生である私が、大学に入った春から所属している団体での経験をご紹介します。今では週に何度も通っている NPO 法人「そら」です。支援学校や支援学級に通う子どもたちのために、週末や長期休み中に活動をしており、私たちボランティアの学生は、毎週その活動のための企画をしています。

私たちは子どもたちと工作をしたり、料理をしたり、ゲームで遊んだりしています。年に 1 回カラオケやボウリングに行ったり、夏にはプールに行ったりもします。参加者は様々な障がいがありますが、明るい子が多く、中には英語や英語以外の外国語であいさつする子どももいて、留学生である私も歓迎してもらえます。活動中は参加者 1 人につきボランティアの学生が 1 人つき、1 日を過ごします。

はじめて活動に参加した時、私は高校 3 年生の女の子の担当になりました。私も高校から卒業したばかりだったのでほとんど同い年でした。彼女は親切な子で、とても優しくしてくれました。また、英語を使ってみたり、私が英語を使ったら大きな笑顔を見せてくれました。何度かペアになったのち、折り紙を折ったり、手紙を書いて持ってきてくれたり、私についての歌を作曲して披露してくれることもあり、感動しました。

外国人として日本にいると、学校では授業についていくために周りの学生や先生に頼ったり、書類が難しくて市役所、郵便局、不動産屋でも周りの人たちに助けてもらったりすることが度々あります。助けてもらうたびに感謝の気持ちを持つのと同時に、これだけ助けてもらっている社会に何か貢献したい！という気持ちが湧いてきます。

はじめは文化や言語の壁があり、慣れないことが多かったのですが、ボランティアを続けるうちに、少しでも社会貢献できているといいな、と思うようになりました。また、続けて参加することで、母国や家族から遠く離れて暮らしている私も、どこかに属している気持ちや誰かに必要とされていることを日々実感できるのです。

大学に入って「そら」を見つけてよかったです。これからも「そら」との関わりを楽しみにしています。

ぷらっと・かとりーな
同志社大学 心理学部 3 回生

アメリカ出身。高校卒業後の 2017 年に留学で来日。興味のある分野や学びの環境が充実している京都で学びながら、「京都留学生 PR チーム」に所属し、京都の魅力を発信するなど、多方面で活躍中。

京都から世界へ
世界から京都へ

京都は、歴史、文化、全てが魅力的なまち
大学コンソーシアム京都は
様々な取組により国際交流を推進します



留学生スタディ京都ネットワーク

加盟校・日本語学校・専修学校等の教育機関、企業、関係業界団体、公的機関等のオール京都による連携組織。留学生の誘致・受入体制の整備や留学生の知識・経験を地域の国際化・活性化に活かすための仕組みづくりに取り組んでいます。

京都留学総合ポータルサイト STUDY KYOTO

大学、住居、就職、観光やグルメ、ごみの出し方まで、留学生のための京都情報が盛りだくさん。
(https://www.studykyoto.jp/ja/)



SNS や YouTube もチェック！

Facebook
@studykyoto

Instagram
studykyoto

YouTube
studyKyoto.jp

etc...

単位互換海外留学派遣プログラム

大学の枠を超えて国際交流へのアクセスを確保できる状況を生み出すべく、単位互換事業を活用した留学プログラムを展開しています。オーストラリア・ビクトリア州の州都メルボルンにて、世界中から集まったクラスメイトとともに学びます。

海外研修プログラム Facebook

研修の様子や募集情報等を発信中。
(@ KyotoConsortiumStudyAbroad)

KyoTomorrow Academy

京都の大学等で学ぶ留学生なら誰でも参加できる、就職やキャリアについて考え、行動に移すコミュニティ。就職、日本語学習、交流支援など、ここにしかないプログラムで、企業人や日本人学生ともつながり、より充実した留学生活を送れるようにサポートしています。

KyoTomorrow Academy Facebook

イベント情報やプログラム・活動の詳細をチェックできます。
(@KyoTomorrowAcademy)

英語スキルアップ研修

大学教職員の英語運用能力が基礎能力として不可欠となる中、能力向上はもちろん今後の語学学習意識の向上を目的として実施しています。

英語で京都をプレゼンテーション

英語圏への留学を終えた学生の「日本や京都のことを聞かれても答えられない」という声からスタート。京都や自国の文化を理解し、英語でプレゼンテーションを行えるようになるための研修を実施しています。



地域に学び、
まちのミライを変えていく

初めて知る「地域で学ぶ」意味

大学コンソーシアム京都では、これまで大学・学生による様々な地域連携の取組を支援してきました。
2004年に始まった「学まちコラボ事業」では、ゼミやサークル単位で地域と連携・協働して実施するまちづくり活動を支援しています。学生が地域を知り、地域の企業や地域団体、行政などと連携し、地域の人々と気持ちを通わせながら、大学で培った知識や技を現場で活かす…そんな「実感を伴う学び」は、地域活動が盛んで学生を大切にする気風に満ちた京都ならではの学びだと言えます。
2016年度からは、地域との協働活動をゼミやサークル単位の取組にとどめず、学長のリーダーシップのもと、大学を挙げた組織的な取組につなげるため、「『学まち連携大学』促進事業」として展開してきました。これは、地域と連携した活動を通じ、学生が学ぶ実践的な教育プログラムの開発と実施に取り組む大学を支援するものです。



左／カモシネマ：鴨川清掃
上／カモシネマ：映画上映



左／都ライト
下／Halloween in 西院：ランタン作りワークショップ



大学と地域との連携の推進は、学生がキャンパス内だけでは得られない学びと成長につながるだけでなく、地域が抱える課題解決の一助となり、京都全体の活性化も期待できます。

大学・学生・地域連携の駅ができた

2019年4月、大学コンソーシアム京都のウェブサイト内に掲載していた「まちづくり事例集」を「大学・地域連携ポータルサイト GAKUMACHI STATION（がくまちステーション）」として一新。学まちコラボ事業や「学まち連携大学」促進事業など、ゼミやサークル単位の取組から大学を挙げた取組まで、幅広く取組実績を発信しています。
「ステーション」とは、つまり「駅」。駅は「まち」の中心にあり、日々、朝から晩まで多くの人が行き交い、仕事、レジャーなど、様々な目的の人々が集まる場所です。「GAKUMACHI STATION」は、そんな京都の地域連携の「駅」になることを目指し、大学・学生が地域と連携した取組をより一層推進するため、継続的、また先進的な取組など、加盟校が持つノウハウを広く提供しています。







左上／わくわく研究室
左／淀本町商店街 ふれあいライブラリープロジェクト
上／大谷大学 北大路コミュニティメディア

京都で活躍する
大学生たち

3

京都学生広報部
×
池田あかねさん
唐澤葵衣さん











受け身だった私を変えてくれた

「人生の転機は？」と聞かれたら、間違いなく「京都学生広報部に入部したこと」と答えます。元々受け身だった私が、自発的に行動する楽しさに気づけたのは、京都学生広報部と部員のおかげです。

活動の中でたくさんの“京都の大学生”と出会いました。それまで出会ったことのない、自分とは違う生き方や考え方の人たちを見て、純粋に「かっこいいな」と。刺激を受けたい一心で、活動に参加し続けました。

２回生では SNS 担当として、興味のあった“広報”に尽力しました。SNS によってターゲットが違うので、投稿時間を変えたり文体を工夫したり、戦略を立てて広報することの楽しさに気づき、のめり込みました。3 回生からは、初の主催イベントを企画したり、自分にしか書けない記事を書いてみたり、やりたいことは全て行動に移しました。京都学生広報部は、自分で行動すればするほど、面白いんです。発言しやすい雰囲気と、やりたいことをやらせてもらえる環境がここにはあります。

京都学生広報部はまだまだ発展途上です。だからこそ、やりがいがあります。記事の閲覧数が伸びたり、「高校の時に記事を読んでいた」子が入部してくれたり、企業からコラボ企画のご依頼を受けたり。ぐんぐん成長しているのを実感できるんです。

京都学生広報部に入部していなかったら、私は「普通の」大学生でした。学校で授業を受けて、アルバイトをして、時々友達と遊ぶ。そんな大学生活も、もちろん楽しかったでしょう。でも、京都の大学生で集まって、「中高生に京都で大学生活を送る魅力を発信する」ことに熱中する大学生活が、私にとって最高の選択だったと確信しています。



かけがえのない宝物

自分のやりたいことと、それをうまく形にできる場所を見つけるとき、学生はどのような行動をとるでしょうか。蔵書を読む、キャンパスから飛び出して探し出すなどあらゆる方法が挙げられますが、考えて選択をする場所が「京都」にあること、それが「大学のまち・学生のまち」にとって大事なのではないかと思います。その中で、志を一緒に持つ仲間と応援してくださる方々の存在、挑戦できる場所を創り上げていくプロセスに価値があるとすれば、京都学生広報部はその環境と力が十分にあります。

一番の思い出は、京都学生広報部の卒業生を紹介する「卒業生プロジェクト」を立ち上げたことです。新メンバーを募集する際に京都学生広報部の活動やミッションをより深く知ってもらえるよう、ウェブサイト「コトカレ」に新入部員説明会の詳細に加え、「卒業生インタビュー記事」が一覧で表示される導線をつくりました。

たくさんの人たちの支えとご縁があり、今の京都学生広報部があります。そして、大学の垣根を超え、尊敬する先輩・後輩、一緒に走り続けた大切な仲間に出会えたことは今の私にとって、かけがえのない宝物となりました。

最後に、「コトカレ」が、記事を読んだ高校生にとって、これからの進路や人生を見つめる中で、その人の思考や「なぜ」に寄り添い、将来の後押しをするきっかけになるような場所になればいいなと思います。「京都」というまちがこれからもたくさんの人にひらかれ、個性が尊重されるまちであるよう願っています。

いけだ・あかね
同志社大学 政策学部 4 回生

1 回生の冬に「一瞬で過ぎる大学生活で、遊んでいるだけでは勿体ない」と思い立ち、以前から興味のあった“広報”に携われる団体に入部することを決意。

からさわ・あおい
佛教大学 社会学部 4 回生

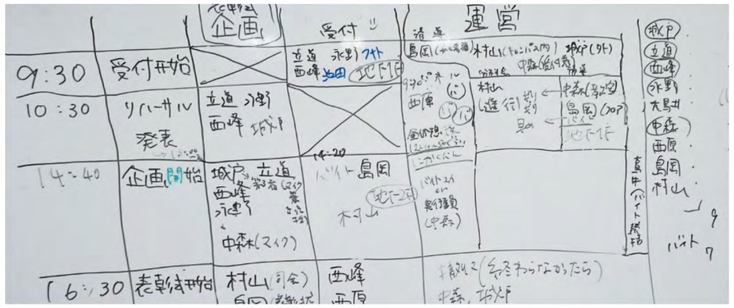
取材や企画、デザインに関わることをしてみたいと、京都学生広報部に入部。先方への依頼・記事執筆・編集の基礎からチーム力までたくさんのことを学んだ。

京都で活躍する
大学生たち

4

京都から発信する政策研究交流大会
×
中森大樹さん











大会をつくり上げる喜び

私にとって「京都から発信する政策研究交流大会」というものは、政策学部に所属していることもあり、まったく耳にしたことが無いというわけではありませんでした。所属しているゼミでは、３回生の活動の発表の場として毎年参加していて、先輩方から大会の雰囲気の話を聞く機会もあり、ぼんやりと大会のイメージは頭の片隅にある中で実行委員に応募しました。

2018 年度は委員の人数が９名と例年より少なかったため、大会の運営を進めていく上で苦労もありました。とりわけ約 400 の人々が参加するイベント運営をした経験はもちろん私にはなく、その難しさを知りました。大会としては１日のみの開催でしたが、自分の想像を遥かに超えるくらい前から準備を行う必要がありました。企画に不備がないかを確認し、他の良い案があれば再考を重ね、より良いカタチにしてつくり上げていく。自分達の意見が採用された時は喜びもひとしおでした。

実行委員のメンバー、大学コンソーシアム京都の職員の方々、学生企画のゲスト講師として力を貸してくださった塩見先生（福知山公立大学）をはじめとして、当日は発表者として参加してくださる学生達も加えて、多くの人々が携わることで１つのイベントが形成されます。2018 年度で本大会は第 14 回を迎えましたが、同じ実行委員のメンバー、同じ発表者で次の大会を行うことは２度とないからこそ、「学生への発表機会の提供と大学やゼミの枠を超えた研究交流の機会」という大会のスタンスは変わらずとも、中身は改良され進化し、毎年全く違うものになります。「参加」であったり「協力」であったりと様々ではありますが、大会という機会を通してひとりひとりがその過程で得たものは、この先必ず活きてくるのではないかと思います。

なかもり・たいき
同志社大学 政策学部 4 回生

所属ゼミが毎年「京都から発信する政策研究交流大会」に発表者として参加していること、学生の多い京都に住む１人として、同じ地域に住む同年代が社会や都市政策に対してどのようなことを考えているのか気になったことがきっかけで加入。

ミライ対談 ー大学コンソーシアム京都への期待ー

Miyuki OSAKAMI × Kazuhiro SHIONOYA



2019 年に設立 25 周年を迎えた大学コンソーシアム京都（以下「コンソーシアム京都」）。ここでは日頃からコンソーシアム京都の運営を支えていただいているお二人に、大学のまち京都・学生のまち京都のこれからの展望についてお話しいただきました。

ー 2019 年度から「第 5 ステージプラン」に基づいた取組が展開されます。このプランに込めた想いなどをお聞かせください。

長上：2017 年度にプラン策定を担う大学政策委員会を立ち上げてから、あっという間に 2 年が過ぎました。この間、加盟校の皆様にはアンケートやヒアリング調査にご協力いただきました。プランでは、こうした加盟校の声を取組に活かすとともに、特に「地域とのつながり」を意識しています。大学・学生・地域の三者が連携をより深め、量から質への転換を図ることが特に重要と考えています。

塩野谷：18 歳人口が減少していく中で、高等教育機関にとっては大変厳しい時代に入ります。その時、コンソーシアム京都は、どのように加盟校をサポートしていくのかを考える必要があります。プラン策定の議論に関わる中で、これからの社会変革を見据えて、加盟校がすべき取組とコンソーシアム京都がすべき取組に分け、取組のスクラップ & ビルドをしていくことが大切だと感じています。

長上：そう思います。もっとコンソーシアム京都から加盟校へ返していく取組があっていいと思います。第 5 ステージは、この 25 年間を振り返っても非常に重みのあるステージになるでしょう。特に重要なのが取組の「位置づけ」と「内容」です。コンソーシアム京都がモデルとして先駆的に取組を担った後、加盟校が自分たちの取組として展開していくことで、加盟校の声や学生のニーズに合わせて拡大してきた取組を、整理していく時期になると思います。

塩野谷：コンソーシアム京都は、全国に先駆け「大学を活かしたまちづくり」に積極的に取り組んでいると実感しています。一方で「単位互換制度」や「インターンシッププログラム」など基幹的取組が定着している反面、学生が参加しづらい取組もあると感じています。第 5 ステージは、それらの取組を見直すきっかけになるのではないでしょうか。

私自身、京都に来て 1 年が経ちますが、コンソーシアム京都の運営に関わってこそわかる部分があります。加盟校にとっては、まだコンソーシアム京都の取組が見えにくいところがあるのではないでしょうか。それが、単位互換などの取組への関わり方の違いに表れているのかなと思います。

長上：第 5 ステージは加盟校の規模に関わらず、コンソーシアム京都の取組がそれぞれの大学にとってメリットのあるものにしたいと思います。そのためには、すべての加盟校が関わることができる仕掛けが必要ですね。例えば、運営委員会で、一つのテーマについて議論をするとか、委員以外の先生方にもオブザーバーとして参加してもらうことで、活性化したいと思います。

塩野谷：そうですね。定期的に加盟校の教職員の方々が「京都の大学を良くしよう」と議論を深める場があるのは素晴らしいことです。せっかくの機会ですからお互いの大学のノウハウを共有できる場になるように工夫したいですね。

長上：運営委員会の中で加盟校の困っていることや、他大学と一緒に話し合いたいことを出すことができればいいですね。そうすれば、委員会の活性化につながって、コンソーシアム京都や加盟校の取組にもいい影響が出ると思います。

ー全国初の大学コンソーシアム組織としての京都についてお聞かせください

長上：今は、一つひとつの取組で大学や地域と連携しているため、閉じられているわけではないですが、広がらないイメージがあります。一つの事例ですが、学生が政策提案を行う「京都から発信する政策研究交流大会」は、2018 年度は龍谷大学で開催しました。キャンパスプラザ京都で行っている取組を加盟校で持ち回って開催することで、これまで関わりが少なかった地域の方や、大学の教職員、学生の参加にもつながり、新しい発見やつながりに活かされるのではないでしょうか。

塩野谷：京都市ではコンソーシアム京都との協働事業を多くさせていただいていますが、取組によって教職員や学生のタイプやアプローチの仕方が異なると感じています。取組を越えたつながりができれば、新しい取組が生まれ、さらなる取組の展開にもつながるかもしれません。

長上：「つながり」という点でいうと、コンソーシアム京都には「交流の拠点」になってもらいたいです。イメージ的には大学サロンのような。どこかの部屋にいけば他大学の学生がいて、研究の話が自由にできる。若手教員の集いや事務職員の集いのような日があってもいい。そこに企業が来るとインターンシップの話ができるとか。そういう場所になれば、新しい連携も探れると思います。

塩野谷：そのとおりだと思います。加盟校との意見交換の中で、「留学生をもっと受け入れたいけど、ノウハウがないから踏みだせない」といったご意見をお聞きしました。他大学ではどうやっているのか、そういった悩みや認識を共有できる場がほしいという声をいただいています。

長上：昨年の運営委員会でも、留学生について「入管が厳しくなっているけど、どうしてる？」「災害の時にどうアナウンスしてる？」といったご質問がありました。その時は質問に答える形で終わりましたが、これからはより具体的な交流につなげることができたらいいなと思いました。

塩野谷：意見交換をする中で見えてきた行政的な課題があれば、市で対応を検討したり、国に要望するなど、我々も参画しているからこそできることがあると思っています。

ーキーワードとして、コンソーシアム京都と加盟校との「つながり」がありました。今後つながりをより深めていくために必要なことなどをお聞かせください

長上：「京都世界遺産 PBL 科目」のように、世界遺産に学生を連れて行く科目がありますね。すごく熱心に取り組んでいる様子が報告書からも伝わります。インターンシップもそうですが、学生の成長度合いが大きいので、報告会をもっと多くの人に聞いてもらえるような工夫が必要ですね。

塩野谷：中教審のグランドデザインでも、大学は行政や産業界とも緊密に連携して特色ある高等教育を展開していくことが示されています。加盟校には、社会貢献を含めた特色ある教育研究を提供いただいていますが、ノウハウがないため十分に取り組めない部分もあると思います。大学のまち・京都として、行政側でサポートできることは是非していきたいと思いますが、コンソーシアム京都には、25 年培ってきた大学間連携組織として、後押しや先導していくといった役割を果たしていただきたいです。

長上：私たち教員にとっては、国の文教政策そのものを勉強する機会がなくて、どういう方向なのかわかりづらく感じます。コンソーシアム京都で文教政策を学ぶ機会がもっとあっていいと思います。これからは、情報収集や幅広い観点から学ぶことが大事になってくると思います。

塩野谷：京都市としても国との連携を強化していきたいと思いますので、そうした学習や意見交換の機会に我々も積極的に関わっていきたいと思います。現場感を伝えるという意味では、コンソーシアム京都にも、加盟校の悩みなど現場の声を拾って届けていただきたいです。

長上：運営委員会に京都市の職員であり、文部科学省の職員でもある塩野谷部長が出席されていることは大きいですね。民間の中で話ができることは非常に意味のあることですから。是非、何かのテーマで話していただき、意見交換をしたいです。

塩野谷：よろしくお願いします。ところで先生は、第 5 ステージプランと同時期に、京都市とコンソーシアム京都の協働で策定した「大学のまち京都・学生のまち京都推進計画2019-2023」はご覧いただきましたか？

長上：拝見しました。我々の第 5 ステージプランと同じ方向を向いていると感じました。委員会でも非常に熱心な議論がされたと聞いています。大学にとって京都市は特別な自治体で、ここまで行政が大学を大事にしている地域は他にありません。地域連携をはじめとした取組が展開できるのも、大学と行政が緊密に連携しているからだと実感しています。

ーコンソーシアム京都への今後の期待について

塩野谷：今後大学にとっては、社会人の受け入れが一つの大きな課題となると思っています。それには産業界との連携が不可欠です。そこでコンソーシアム京都には大学間連携組織として、加盟校を代表した取組をやっていただきたいです。

長上：それはすごく求められていることですね。ぜひ取り組んでほしいと思います。コンソーシアム京都には何か仕掛けてほしいですね。

塩野谷：そうですね。今後も積極的な展開を期待しています。長上先生は、大学職員に対して求められる役割が大きくなっていることについてどのようにお考えですか？

長上：確かに大学事務は高度化しています。先の文教政策の話と同様、大学職員は関心をもって勉強していく必要があります。だからこそ、コンソーシアム京都には一大学では難しい、大学職員の学びの場を提供してほしいと思っています。

塩野谷：今、「自分たちの大学がどうなっていくのか、どうあるべきなのか」と問題意識を持っている大学職員の方には、是非コンソーシアム京都で、我々と一緒に仕事をしていただきたいと思っています。SD 事業を含めた様々な事業に取り組むなど、コンソーシアム京都の中で色々な経験を積むことは、加盟校にとってメリットになりますし、コンソーシアム京都としても、加盟校を時にはリードしたり、サポートしたりといった役割を果たしていけると思います。

長上：大学院の連携もまもなく課題となってきます。それに先駆けてコンソーシアム京都で退職教員のチームを作るのはいかがでしょう？京都には退職された教員が沢山おられます。登録してくださった先生方で例えば「ダイヤモンドチーム」や「インテリジェントグループ」のようなチームを形成し、様々な取組に関わっていただきたいです。教育や社会人教育には英知が必要になります。コンソーシアム京都として知的財産を活かすような取組ができれば、大学のまちも活性化するし、京都市としても新たな連携が生まれるのではないでしょうか。



龍谷大学・短期大学部　副学長

長上深雪（おさかみ・みゆき）

[2017～2018 年度]
大学政策委員会副委員長
次期ステージプラン策定部会部会長



京都市総合企画局総合政策室
大学政策部長（文部科学省から出向）

塩野谷和寛（しおのや・かずひろ）

[2018 年度]
大学政策委員会委員
次期ステージプラン策定部会委員

事業の変遷

区分　財団共通・総務　教育　教育開発　学生支援　国際　調査・広報　研究等

第 1 ステージ　**第 2 ステージ**　**第 3 ステージ**　**第 4 ステージ**

1994　1995　1996　1997　1998　1999　2000　2001　2002　2003　2004　2005　2006　2007　2008　2009　2010　2011　2012　2013　2014　2015　2016　2017　2018　2019

1993
- 「大学センター設立推進会議」発足

1994
- 「京都・大学センター」発足

1995
- 大学のまち交流センター（仮称）基本構想策定

1998
- 学生課外学習プログラム開講

1999
- 遠隔講義検討開始

2000
- 将来構想検討委員会発足・「最終答申」策定
- 京都市大学のまち交流センター（キャンパスプラザ京都）完成
- 大学公開講座開講
- 京都起業家学校開講（京都市委託）

2001
- プラザカレッジ開講
- リメディアル教育プログラム開始
- 高度人材育成事業－京都 MOT プログラム
  離職者訓練講座（京都府委託）開始

2003
- 「大学のまち・わくわく京都推進計画」（京都市）策定

2004
- 大学コンソーシアム京都設立 10 周年記念式典・記念誌発刊
- 全国大学コンソーシアム協議会発足（事務局運営）
- 大学コンソーシアム京都ロゴマーク制定

2005
- 特定公益増進法人の認可

2006
- 「京（みやこ）カレッジ」ロゴマーク制定

2007
- プラザカレッジ京都学講座
  （全国プロジェクト in 名古屋）開催
- インターンシップ・プログラム 10 周年記念シンポジウム
- 第 1 回スポーツ文化研究会

2008
- 京都創造者大賞 2008 アート・文化部門受賞（京都学生祭典）
- 平成 20 年度地域づくり
  総務大臣表彰団体表彰受賞（京都学生祭典）
- 「大学のまち京都・学生のまち京都推進計画」策定
  （2009 ～ 2013 年度）（京都市協働）

2009
- 「プラザカレッジ」を「京カレッジ」に統合
- まんが FD ハンドブックおしえて！ FD マン
  ［新任教員編］刊行

2010
- 公益財団法人 大学コンソーシアム京都移行認定
- キャンパスプラザ京都 10 周年記念式典
- まんが FD ハンドブックおしえて！ FD マン
  ［成績評価編］刊行

2012
- 公式 Facebook 開設

2013
- まんが FD ハンドブックおしえて！ FD マン
  ［授業奮闘編］刊行
- 第 10 回全国大学研究交流フォーラム（於：京都）開催
- 「大学のまち京都・学生のまち京都推進計画」策定
  （2014 ～ 2018 年度）（京都市協働）
- 高等教育イベントナビ『教まちや』開設

2014
- 大学コンソーシアム京都設立 20 周年記念講演会・懇親会

2015
- 京都学生広報部 ウェブサイト「コトカレ」開設
- 「留学生スタディ京都ネットワーク」設立
- 京都世界遺産 PBL 科目開講

2016
- 京カレッジ「大学リレー講座」開講

2017
- 文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」
  （タイプ 5）の申請が採択（2018 年度継続採択）

2018
- 「大学のまち京都・学生のまち京都推進計画」策定
  （2019 ～ 2023 年度）（京都市協働）

2019
- 大学・地域連携ポータルサイト
  GAKUMACHI STATION（がくまちステーション）開設

全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム
学生 Place＋
図書館共通閲覧システム運用
「勤労学生援助会」事務局
単位互換事業
インターンシップ事業
単位互換事業「京都世界遺産 PBL 科目」
シティーカレッジ（京都市委託）
「京（みやこ）カレッジ」
社会人のための大学案内相談室設置およびガイドブック発刊
特色ある大学教育支援プログラム
「大学連携による新しい教養教育の創造～京都地域における単位互換制度～」
eラーニング科目
京カレッジ大学リレー講座
戦略的大学連携支援プログラム「e ラーニングシステムの共有共用化に伴う教養教育の大学間連携と効率化の促進」
特色ある大学教育支援プログラム「産官学地域連携による人材育成プログラム～京都地域におけるインターンシップの展開～」
FD フォーラム
戦略的大学連携支援プログラム
「地域内大学連携による FD の包括研究と共通プログラム開発・組織的運用システムの確立」採択
京都 FDer 塾
京都 FD 執行部塾
大学執行部塾
新任教員 FD 合同研修プログラム
FD 合同研修プログラム
大学職員共同研修プログラム
SD フォーラム
大学アドミニストレータ研修プログラム
SD ゼミナール
SD ガイドブック刊行
高大連携教育フォーラム
高大連携事業「Kyoto カタリ場」
京都の大学「学び」フォーラム
高大社連携キャリア教育プログラム
高大連携事業「実践研究共同教育プログラム」
京都・学生フェスティバル
京都学生祭典
京都国際学生映画祭
芸術系大学作品展
「関西障がい学生支援担当者懇談会（KSSK）」事務局
大学コンソーシアム京都スポーツクラブ設置
留学生スタディ京都ネットワーク
学生短期留学プログラム（ボストン（～2015））（メルボルン）
教職員対象 英語スキルアップ研修
留学生のためのキャリア支援プログラム
留学生フェア・留学情報提供
職員対象海外研修プログラム（メルボルン）
戦略的大学連携支援プログラム
「多面的な国際交流の充実と高等教育の質向上に向けた国際連携プログラム開発」
留学生を対象とした有給インターンシップ
海外留学派遣プログラム開発支援事業（京都市協働）
留学生就職交流支援コミュニティ（KyoTomorrow Academy）
京都学生広報部（京都市協働）
「学まち連携大学」促進事業（京都市協働）
「大学の知」を活かした多角的な市政研究事業（京都市協働）
大学地域連携モデル創造支援（学まちコラボ）事業（京都市協働）
学術コンソーシアム（2004 年度「京都学術共同研究機構」に統合）
政策系大学・大学院研究交流大会
京都から発信する政策研究交流大会
京都学術共同研究機構設置
研究者データベース
シンクタンク事業「未来の京都創造研究事業」（京都市協働）
リエゾン・オフィス設置
京都 B＆S プログラム（京都市協働）
京都アカデミア叢書発刊
京都学講座









写真提供：阿部拓海さん

あべ・たくみ
京都外国語大学 外国語学部４回生

本誌の扉、P39-40 の写真を撮影。京都学生広報部の PR チーム所属。スマートフォンで撮影する写真に定評があり、Instagram（gakusei_kyoto）の更新を担当している。中学校の修学旅行で訪れた京都に強く惹かれ、京都の大学へ進学。大好きな京都を「誰よりも楽しんでやる」という想いを胸に、観光スポットを巡るだけでは飽き足らず、今では京都の歴史や伝統産業、京ことばや京菓子を学ぶ日々。



公益財団法人 大学コンソーシアム京都
会報 50 号・設立 25 周年記念号

発行日　2019 年 6 月 22 日
編集　公益財団法人 大学コンソーシアム京都
〒600-8216
京都市下京区西洞院通塩小路下る
キャンパスプラザ京都内
TEL　075-353-9100
FAX　075-353-9101
MAIL　pr-ml@consortium.or.jp

WEB / SNS

www.consortium.or.jp

Facebook
www.facebook.com/consortium.kyoto/

BACK NUMBERS



No.46 / 2015 Jan



No.47 / 2016 Jan



No.48 / 2017 Jan



No.49 / 2018 Mar